

2022(令和 4)年 2 月 26 日

博士学位申請論文審査報告書

博士学位申請論文審査委員会

主査 藤本 滋之

副査 伊藤 彰浩

副査 中西 弘

学位申請者 18DC001 西村 知修

論文題目 「現代英語における動詞句修飾副詞の実証的記述研究」

(A Usage-based Study of Verb Phrase Adverbs in Present-day English)

【審査の経過】

2021(令和 3)年 3 月、論文作成計画書が提出され英文学専攻委員会・文学研究科委員会にて報告了承。同年 10 月 12 日、事前審査論文が提出され、英文学専攻委員会・文学研究科委員会にて事前審査委員会設置を承認(委員は本審査委員会と同様)。11 月 12 日、事前審査委員会を開催し、修正・加筆を条件に本審査論文の提出を認めることとした。12 月 6 日、本審査論文が提出され、英文学専攻委員会・文学研究科委員会にて本審査委員会設置を承認。2022(令和 4)年 2 月 14 日、口述試問(公開)と本審査委員会を開催し審査を終了した。同 26 日、英文学専攻委員会・文学研究科委員会にて審査結果を報告し承認。

【論文の概要】

本論文は、現代英語における動詞句修飾副詞の生起位置と意味機能の関係を、コーパス(COCA)にある実例を量的・質的に分析することにより明らかにしたものである。動詞句修飾副詞の中でも特に様態副詞(manner adverb)と呼ばれるものの意味機能は、生起する位置あるいは動詞句との意味関係によって多様に変化し、このことが同副詞の統語構造と意味の解明を妨げてきた。そこで、本来の意味が特定できるような動詞句と副詞に注目してコーパスの実例を探り、位置変化・状態変化の様態を表す様態副詞は動詞の後に生じること、動詞の前に生じる副詞は、(1)脱焦点化様態副詞、(2)VP-shell における上位の動詞を修飾する様態副詞、(3)価値判断の主語副詞、(4)心的態度副詞のいずれかであると論じている。

第 1 章では、以上のような研究の骨子を明確にし、このような記述的研究を進める動機が明らかにされている。Cinque (1999)や Ernst (2002)に代表される理論的研究では捉えられない言語事実が数多く存在することが指摘され、中でも Haumann (2007)が挙げながら彼自身は追究することがなかったデータ(4)(p.2)が、本研究の意義を象徴するものとして取り上げられている。

第 2 章では、本研究の前提となる基本概念を確認し、先行研究の概要と問題点が総括さ

れている。副詞がどのように分類され、様態副詞というものがどのように位置づけられてきたか、様態副詞として機能する副詞の他の可能な意味機能、VP-shell (Larson 1988, Hale and Keyser 1993)の構造における様態副詞の二義性、統語論における副詞の扱い、主題関係によって文の基底構造が決定するという理論(UTAH: Baker 1988)と副詞の生起位置との関係等、副詞の構造と意味を議論する上で欠かせない概念および従来の研究成果と問題点が考察され、まとめられている。

第3章では、様態副詞研究において Jackendoff (1972)以来認識されてきた「下位範疇化副詞」の概念を覆し、副詞の存在が必須とは限らないこと、動詞の後ろに生起するのは<主題>あるいは<場所>役を担う内項(internal argument)の状態変化を表すためであること、動作主の行為を修飾する様態副詞ではなく、状態変化を修飾する結果副詞や程度副詞として機能していることが論じられている。To word the letter carefully, to pay somebody handsomely, to dress elegantly といった Jackendoff (1972)の有名な例を見直し、下位範疇化副詞という概念が必ずしも妥当でないことを、COCA にあるデータの量的・質的分析によって結論づけている。ここでいう質的分析とは、前後のコンテキストつまり談話情報を考慮に入れた意味分析を指している。

第4章では、様態副詞の用法しかない「中核的純様態副詞」(Schäfer 2002) loudly, tightly, brightly, woodenly の具体例をコーパスで調査し、こういった副詞が確かに動詞のあとに生起し、<主題>または<場所>役を担う内項に関わる状況の様態を表すのが基本であることを、動詞(句)との意味関係や、動詞(句)前後の談話情報をもとに確認している。その上で、これらの副詞が動詞の前に生起する例をコーパスで確認し、それが脱焦点化した様態副詞、あるいは主語の状態・性質を表す副詞であることを、動詞(句)との意味関係および前後のコンテキストに基づいて議論している。

最終章では、各章の要点と意義を確認すると共に、今後の研究の発展の可能性に言及している。要点を再確認すると次のとおりである。

- (1)動詞の後に生起する様態副詞(中核的純様態副詞と呼ばれる)は、<主題>または<場所>役を担う内項(目的語)の位置変化・状態変化の様態を表すのに対し、動詞の前に生起する様態副詞は、<動作主>役を担う外項(主語)の行為の様態を表す。
- (2)本来は動詞の後に生起する中核的純様態副詞であっても、脱焦点化によって前に生起する場合(脱焦点化した中核的純様態副詞)と、メタファーによる意味拡張によって外項(主語)の行為の様態を表す場合がある。
- (3)下位範疇化副詞と呼ばれてきた副詞は必ず動詞の後に生起し、<主題>または<場所>役を担う内項の変化した結果の状態や程度を表す。

上記の結論は、様態副詞と総称され、主語の行為の様態を表すと見られてきた副詞全般について、その意味の多義性・多様性を解明する可能性を秘めている。その一端が最後に carefully の例を用いて示されている。

【論文の評価】

本論文最大の意義は、これまで「様態副詞」として総称されてきた副詞の多様な生起位置と意味機能を、生起位置と意味用法が限定されている下位範疇化副詞と中核的純様態副詞に注目し、コーパスで得た具体例を用い動詞(句)との意味関係および動詞(句)以外の談話情報に基づいて分析するという手法で実態を明らかにしたことである。下位範疇化副詞と中核的純様態副詞が共有する統語特性、すなわち生起位置が動詞の後ろに限定されるという特性に注目し、両者が VP-shell の下位動詞領域に生起し、この領域に属する内項の意味役割である<主題>あるいは<場所>の位置変化あるいは状態変化の様態を表すという一般化を導くことに成功している。他方、中核的純様態副詞が動詞の前に生起する場合は、VP-shell の上位動詞領域に生起し、この領域に属する外項の意味役割<動作主>の行為の様態を表すと説明される。この研究手法と結論は、最終章で著者自身も触れているとおり、下位範疇化副詞や中核的純様態副詞以外の動詞句内修飾副詞の多様な意味機能を明確に分離抽出する可能性を示唆している。これが本研究の大きな貢献であると言える。

下位範疇化副詞の中には結果副詞と見なすべきものがあるという結論は、下位範疇化副詞の統語的・意味的特性の実態を解明した半面、副詞と結果述語あるいは二次述語全体の関係を考慮する必要性を生じさせ、実際 3 章の一部で論じられているが、先行研究で扱われている例に留まり新たなデータの開拓はない。さらに、単純形副詞(flat adverb)も含め三者間の違いを明らかにすることが課題として残る。

VP-shell を前提とし副詞が生起する位置を構造的に裏付けた点も評価できるが、その上位領域と下位領域を限定した上で様態副詞の生起位置と意味機能を吟味すると、さらに説得力ある議論が展開できるものと考えられる。具体的には、<動作主>を担う外項のみを持つ非能格動詞と、<動作主>を持たず<主題>あるいは<場所>を伴う非対格動詞それぞれについて、様態副詞との語順関係と意味関係を考察すれば、本研究の結論がさらに強化されるものと期待できる。

中核的純様態副詞と考えられるものの中に、主語副詞あるいは心的態度副詞としての用法がある場合について、メタファーによる意味拡張という分析がなされているが、このような意味拡張の度合いは副詞によって異なる。そのような意味拡張を決定づける要因を抽出する作業も今後の課題となるであろう。

以上のような課題は残るものの、本研究は目的の明確さ、研究手法、論文の構成と議論展開、結論の応用可能性等の点で、博士の学位を授与できるレベルに十分達しているものと判断される。なお、本博士学位請求論文の内容の一部は、英語コーパス学会(2019)、関西語法文法研究会(2018)、日本言語テスト学会(2016)、日本英文学会九州支部大会(2016)において口頭発表され、分担執筆の著書(八木克正他編(2020)「英語実証研究の最前線」開拓社)、本学大学院論集(2016、2017)、QUEST(2017、2021)において計 5 本の論文として刊行され、すでに一定の評価を受けていることを申し添える。

学位請求論文の内容、事前審査から本審査に至る過程での迅速かつ適切な対応力、最終試験(口頭試問)における応答に基づき総合的に判断した結果、審査委員全員一致で、西村氏の研究が博士(文学)の学位を授与するに相応しいものであるという結論に達した。